

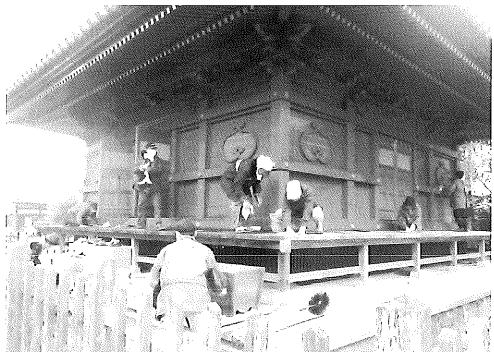
博物館だより



No.82

平成25年2月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666



▲友の会主催「三重塔すす払い」平成24年12月1日

博物館の窓口で会員登録を行なってください。
個人会員 3000円
家族会員 1名2000円

お問い合わせ先
みやこ町歴史民俗博物館内
友の会事務局

TEL 0930-33-4666

の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに講演会やバスハスク、史跡巡りなどさまざま行事を行っています。意欲のある方であればどなたでもお気軽に参加いただけます。ぜひご入会ください。

入会の方法

博物館の窓口で会員登録を行なってください。

年会費

現在のみやこ町出身で、後に名をのこした先人を顕彰するDVD「みやこの歴史発見伝！みやこの先人」を当館にて好評販売中です。

ナビゲーター役の女性が先人ゆかりの土地や人を訪ねながら、その人生と業績を紹介する内容で、10名の先人をとりあげて、1名につき1本、計10本の映像ソフトにまとめています。先人を切り口にわが町を見ると、驚くような発見がいっぱいです。郷土を愛するには先ず郷土を知ることから。ぜひ、「みやこの先人」をお手元に！

DVD収録の先人10名

岩垂邦彦(NEC創業者)

小宮豊隆(独学者・漱石門下)
堺利彦(日本社会主義運動の父)

下枝董村(異才の書家)
鶴田知也(芥川賞作家)

中村春堂(かな書道の名手)
葉山嘉樹(プロレタリア作家)

吉田学軒(元号「昭和」創案者)

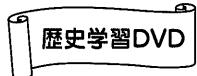
吉田健作(近代製麻業の父)

吉原古城(書家・漢学者)

吉原古城(書家・漢学者)

**博物館友の会
会員募集！**

みやこの歴史発見伝！



みやこの先人

▲「みやこの先人」ジャケット



博物館からのおねがい
古い写真を「提供下さい

博物館では生活文化史料としての価値が注目されている「古い写真」を収集しています。

みなさんのご家庭にあるもので、地域や時代の特性が写っていると思える写真がありましたら、博物館までご連絡ください。譲つてもよい公開してもよいという

写真についてはみやこ町の生活文化史料として保存活用させていただきます。

なお、「写真提供」にあたっての要領は以下の通りですが、くわしいことは博物館(TEL 33-4666-6)までお問い合わせください。

○対象となる写真の由来
昭和40年(1965)以前の地域の行事・風景・日常を写したもの

○提供までの流れ
博物館へご連絡いただきまして係員が伺い、現物や提供条件等を確認後、収集の良否についてご相談申し上げます。



▲ワラぶきの国分寺本堂(昭和3年)

みやこの歴史発見伝 62

古文書が語る村の生活と文化 12

村の名医たち 2

国分村医師・内田玄敬のこと②

消息が途絶えた息子

左に掲げた[史料]は、安政元年（一八五四）に、仲津郡国分村（現みやこの町国分）の医師・内田玄敬。

が、同村庄屋と連名で小倉藩に提出した、大坂畠屋町（現大阪市中央区東心斎橋）。江戸時代の表記は

「大坂」が正しい）に居る息子・秀

[史料] 解読文

御歎申上口上覚

私体秀策儀、医道為稽古

大阪畠屋丁八幡筋中村寿玄

申者方江参居申候然處此度大阪

表大変出来仕、畠屋丁八幡筋辺

別而大破之段承り申候得共、秀策

何之知せ^庚參り不申付、先月

十九日、仕送物并書状相添差遣

候得共、今以何之返書も無御座

如何罷成申候哉、甚氣遣敷御座

候得共、遠路之儀付、仕様も無

御座、家内之者共朝夕相歎居

申候間、何卒

御慈悲之上を以乍恐御役筋様

仰付被下置候様御願申上候、

此段宜御聞通被下置候事難有

奉存候、乍恐仍書付を以御歎

申上候、以上

寅十二月 国分村 内田玄敬

吉永 平兵衛

（国作手永大庄屋安政元年日記十二月二十六日条）

秀策は、前年（嘉永六年・一八五三）二月に大坂に赴き、中村寿玄という本道（内科）の医師に付いて修行をしていました。

ところが、「大阪表大変」によつて消息が途絶え、手紙などを送つても、何の返事も無い、というので、家族一同、心配で心配で仕方が無いものの、何分遠方であるため、安否の確認ができない。ついで、藩の「大阪表御留守居様」（大坂留守居役）に秀策の安否を尋ねてもらわせんか、というのが[史料]の内容です。

安政南海地震

ここでいう「大阪表大変」とは、同年十一月五日に起きた、いわゆる「安政南海地震」のことです。この地震は、紀伊半島から四国沖を震源とし、地震の規模はマグニチュード八・四、最大震度は六七相当と推定されています。秀策の居た大坂でも震度五・六相当の揺れがあり、あわせて地震発生から一時間半ほどのちには二・五・三メートルの津波が押し寄せ、湾岸の低地は大変な被害を受けたのでした（羽鳥徳太郎「大阪府・和歌山県沿岸における宝永安政南海道津波の調査」など参考照）。

家族の中でも、とくに両親である玄敬とその妻「ちえ」は、さぞ気をもんだことでしょうが、幸いにも、秀策は無事で、遅くとも安政五年（一八五八）二月には帰郷しています（国作手永大庄屋安政五年日記二月晦日条）。

秀策以外に半之助・英之助という二人の息子がいたことが分かつています。兄弟関係は、年長から秀策・半之助・英之助の順だつたようです。

秀策・半之助・英之助の順だつたようですが、吉川弘文館）国分村を含む仲津郡十五ヶ村でも、七月六日までの時点では、既に快復した者を含め、一七五六人が麻疹に罹っています（同前史料七月七日条）。これは、郡内のおよそ一〇%に相当する墓地にあります。その墓には玄敬と共に、彼の家族二人が合葬されています。一人は息子・英之助で文久二年三月二十三日に亡くなりました（同前史料三月二十一日条）。もう一人は妻「ちえ」で、玄敬の死より七日前、文久二年六月七日に亡くなっています（同前史料六月八日条）。

三人が亡くなつた文久二年は、筆者の想像ですが、玄敬は、患者のために身を投げ打つて治療にあたるなか、自らも、そして家族までも罹患し、落命する結果となつたのではないでしようか。

世に尽くしながらも、時代が移るなかで忘れられた、もの言わぬ「英雄」たちに、ぜひ、光を当てたいものです。（川本英紀）



▲内田玄敬の墓（みやこの町国分
妻ちえ・息子英之助と共に眠る）